

安田靉彦筆《夢殿》  
—図像解釈と制作背景を中心に—

東京国立近代美術館 三上 美和

安田靉彦(明治17年・1884—昭和53年・1978)筆《夢殿》(大正元年・1912、東京国立博物館蔵)は、法隆寺東院伽藍正堂、通称夢殿にまつわる聖徳太子の説話を絵画化したものである。

病による2年間のブランクを経て描かれた本作品は、第6回文展で最高の2等賞となり、近代美術のパトロンとして知られる原三溪によって買い上げられた、言わば靉彦の画業の初期における記念碑的な作品であり、また晩年に至る先駆的な位置付けがなされている。さらに本作品には、菱田春草筆《賢首菩薩》と共通性を持ちながらも、朦朧体を通じた横山大観、春草達第一世代には見られなかった濁りのない着彩がなされており、それは靉彦、今村紫紅など、新しい世代の日本画家の研究成果であることも指摘されている。

このように重視されてきたにも拘わらず、本作品について、これまで作品解説以上のまとまった考察はなされてこなかった。また、描かれた内容より、むしろ色彩の新しさへの評価に傾く向きが見られる。確かに、線を多用して細部まで綿密に描き込むそれ以前の作風と《夢殿》の間には、大きな変化が見られる。

しかしながら、これまでの検討過程において、本作品にはそうした表現上の特徴のみならず、近代以前に描かれた聖徳太子像とのモチーフ上のゆるやかな連続性、また同時代に行われた古美術の研究や展覧からの影響も明らかになった。そこで本発表では以下の観点から、靉彦が同時代の様々な動向に触れながら、新たな時代に相応しい歴史画を追及していたことを論証する。

まず《夢殿》の画題を確認し、靉彦が個々のモチーフに込めた意図の解明を試みる。その際、靉彦が聖徳太子の主題に精通しており、本作品に古典的なイメージを散りばめると同時に、同時代の古美術の研究成果も積極的に取り入れていたことを示す。ここから、先行作品に依拠しながらも、それに囚われることなく自らの解釈に従い、独自性を打ち出すべく工夫するという、その後も引き継がれる靉彦の制作態度を指摘する。また、《夢殿》と同時代の聖徳太子像とを比較し、本作品の同時代性と独創性を論じる。

その上で、《夢殿》の制作背景を検討する。靉彦が《夢殿》を描いた動機は、靉彦の資質と個人的体験が大部分を占めることは言うまでもないが、本作品の描かれるまでの靉彦の青年期の体験には、明治期の古美術保護や法隆寺の活動など、同時代の仏教美術を取り巻く状況が大いに影響を与えていると考えられる。そうした動向に加え、日本美術史上重要な位置を占めている聖徳太子像が、近代において、芸術と文化の推進者であり、積極的な外交を行った歴史的人物という新たなイメージを付与され顕彰されていったことも、本作品成立の重要な要件として提起したい。